

ICAN Monthly Report 12



ミンダナオ先住民の子どもたち（ブキノドン）

「書くことができるようになって嬉しい！」

アイキャンは、1996年よりミンダナオ島各地の先住民の子どもたちの活動を行っていました。活動は学校の建設や学校給食、先住民用カリキュラムの作成、学用品提供、保健教育や保健師の育成、収入を増やすための伝統工芸研修や環境教育、植林等多岐にわたります。今年度は、学用品の提供を行っており、これまでに同島ブキノドン州の先住民の子どもたち1,023名に届けることができました。

今月は、その学用品提供のモニタリング調査を行いました。まだ提供してから時間が経っていないため、数値的な変化は測ることはできませんが、子どもたちは、提供された学用品を大切に使用し、一生懸命勉強していることを確認することができました。子どもたちから、これまで筆記用具がなかった時と比べて、「書くことができるようになって嬉しい」という声や、「カバンが特に気に入りに」といった喜びの声を聞くことができました。保護者からも、お金がないために学用品を買いたくても買えなかったので、とてもありがたい、という声が多く聞かれました。

サルマヤグ小学校のダルマンドン先生は言います。「アイキャンが来るまで、子どもたちは文房具を持っておらず、私が自分のお金で買って渡したり、何人かの子どもで共有させたりしていました。でも、喧嘩が絶えず、また紙切れを友達からもらって文字を書いているので、次の日にはその紙をなくしてしまい、私たち教師がいくら宿題を与えてもそれに取り組む環境がなく、授業もうまくいきませんでした。子どもたちは文房具を持つようになってから、授業中に私に言われたことを理解したり、忘れずに書いたりしておくことができるようになりました。毎日学校に来るときに笑顔になりましたし、学校を休むことも少なくなりました。アイキャンからもらったカバンを子どもたちはとても大切にしています。なくさないように名前を書いたり、汚れたときは水で洗ったりしているようです。」

先住民の住む山奥の地域には、未だ出生登録もされていないために統計上存在しない先住民の子どもたちが多く存在します。山奥に住む全ての先住民の子どもたちが教育にアクセスできる環境を整えるために、アイキャンはこれからもフィリピンの教育省や先住民の人々とともに活動し続けます。



ICAN マニラ事務所
高橋奈津子 (たかはしなつこ)
～プロフィール～
名古屋大学大学院国際
開発研究科を卒業後、
2013年から教育出版社
社で営業として勤務。
2016年4月より現職。

Project Site



※●はアイキャン活動地
※番号は裏面に対応

認定NPO法人アイキャン

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須3-5-4 矢場町パークビル9階 TEL/FAX: 052-253-7299 メール: info@ican.or.jp

ホームページ <http://www.ican.or.jp> フェイスブック <https://www.facebook.com/ICAN.NGO>

Close up

I. 危機的状況にある子どもたちと「ともに」行う活動

全6事業の中から、今回はこちらの2つをご紹介します。

①路上の子どもたち

11月18日/マニラ(フィリピン)

元路上の若者が「人との関わり方」について伝える

協同組合カリエのメンバー3人が、路上の子ども18名に対して、「身近な人と、どのように良い関係を築くのか」についての路上教育を行いました。特に、喧嘩を暴力ではなく、話し合いで解決したり、人に対して優しくしたりすることの大切さを伝えました。カリエメンバーのリカ(18歳)は、「子どもたちが学校に行ったときにも、今回の内容を活かしてほしい。」と話していました。



②紛争の影響を受けた子どもたち

11月4、11日/マラウィ(フィリピン)

マラウィの避難民へ食糧等の提供とモニタリングを実施

マラウィの3つの避難所において、計353名の国内避難民への食糧及び生活必需品の提供と、これまでの活動のモニタリングを行いました。避難民の方からは、「以前は、缶詰だけを食べていたが、アイキャンから調理用具等を受け取ってからは、温かい料理を食べられるようになった。」「アイキャンから貰うお米はおいしいので、子どもが食べられるようになった。」などの喜びの声を聞くことができました。



II. できること (ICAN) を増やす活動

全7事業の中から、今回はこちらの2つをご紹介します。

NGO 相談員事業

11月12-13日/富山・石川

NGO 相談員として富山・石川に出張



日本事務局の職員が富山の国際交流フェスティバルで、来場した一般の方からのNGOへの就職に関する相談や、富山に本部を持つNGOからの資金調達に関する相談等に対応しました。翌日は、石川県にて、JICA北陸や金沢国際交流財団等と連携方法について協議を行い、担当者からは「お互いの強みを生かした連携をしていきたい」とのコメントがありました。

国際理解教育事業

11月1日/愛知

ジブチ駐在員による帰国報告会



ジブチ駐在員の帰国に伴い、ジブチのイエメン難民キャンプにおける「子どもの広場」での活動や、難民キャンプで暮らす人々の様子についての帰国報告会が開催されました。参加者からは、「アイキャンの活動によって子どもたちが笑顔になっていることがわかった。」「物理的にも遠いジブチ活動する職員の生の声が聞けてよかった。」などの感想がありました。

今月の Topic

「路上の子どものかえ」を題材にした物語で優勝

11月18日/愛知



英語で物語等を発表する「オーラルインタープリテーションコンテスト」(主催:南山大学短期大学部主催)にて、名古屋市立北高等学校の生徒7名が、アイキャン作成の冊子「路上の子どものかえ」を題材にした物語を発表し、優勝しました。参加したある生徒は、「フィリピンの路上の子どもたちとのスカイプ交流を通じて学んだ、同世代の路上の子どもたちの強い生き様を表現したかった」、「フィリピンの子どものかえが、多くの人々に伝わり、心を打ったのだと思う。大会での優勝をゴールとするのではなく、今後も、路上の子どもたちが抱える問題の解決につながる行動を起こしていきたい。」と、熱い想いを語りました。

今月の ICAN な人

◎麻里さん、できることの実践を継続してください、ありがとうございます!

マンスリーパートナー 後藤麻里さん

「路上の子どもたちと『ともに』ありたい」

インタビュー:11月29日

私は、職場の人にアイキャンのスタディツアーに誘われたことがきっかけで、アイキャンを知りました。既に自分の職場がアイキャンと一緒に取り組みを行っている事を知ったのも、その時でした。これまで、仕事があるのは当たり前だと思っていましたが、ツアーに参加してみて、実は幸せなことだと気がきました。路上に生きる人々は仕事をたくしても仕事がなく、仕事をして、見合った対価を得ることが出来ない状況に置かれていることを知りました。また、路上の子どもたちに、将来の夢を聞くと、自分がしたいことではなく、「僕は弟を大学に入れたい」や、「お母さんを幸せにしたい」と答えたことが印象的でした。子どもたちは、厳しい状況に置かれていても、謙虚さと素直さを忘れず、卑屈にならずに現状を受け止めて暮らしているのを見て、自分には何ができるのかと考えました。



身近なことから始めようと、ツアーで学んだ事を身近な人や職場で伝え、興味を持ってくれる仲間を増やしてきました。また、アイキャンの「人々とともに」という考え方に共感し、マンスリーパートナーにもなりました。世界規模で考えると裕福な位置にある日本人は、現地を訪れて路上の子どもたちの現状を確かめる事ができます。だからこそ、私は、路上の子どもたちと「ともに」ありたいと思っています。私の日々の小さな取り組みが積み重なって、今も路上で暮らしている子どもたちの環境が良くなり、笑顔が少しでも増えてほしいと願っています。子どもたちに、幸せが早く訪れますように。

【編集者から一言】書き損じハガキが集まりやすい時期になりました。ハガキを集めてアイキャンにお送りください。ご協力をお願いいたします!